

ウナギ密漁 / 横綱白鵬、全てを語る

7 Guiding Japan forward ウェッジ AUGUST 2015 Vol.27 No.8 定価 ¥500 8

Wedge

Special Report

ウナギ密漁

変わらぬ業界、支える消費者



Wedge Special Interview

横綱白鵬全てを語る
「自分に打ち勝つ」

Wedge Opinion

PKOで強いられてきた「人間の盾」
自衛隊のリアル見ない
安法案審議に物申す

Wedge Report

倫理憲章守り損
後倒し就活の儂さ
8月1日は「拘束」祭り



全生庵にある三遊亭圓朝の墓前で。全生庵・平井正修住職（左）、すし乃池・野池幸三さん（右）

地域再生のキーワード

KEYWORD OF REVIVAL



江戸情緒が残る東京・谷中 幽霊で町おこし

三遊亭圓朝の「幽霊画」コレクションにほれ込んだ、寿司屋の店主。「町おこしになる」と、所蔵していた全生庵の住職に働きかけて「谷中圓朝まつり」が始まった。「まつり」の形や規模は毎年姿を変えながらも30年にわたって続いている。

文・磯山友幸 Tomoyuki Isoyama 写真・生津勝隆 Masataka Namazu



Data

谷根千

谷中、根津、千駄木を合わせて「谷根千」と呼ばれている。戦災を免れた寺などが多く残っており、江戸情緒を醸し出している。全生庵へは、東京メトロ千駄木駅が最寄駅となっている。

夏

の夕暮れと言えば幽霊である。生ぬるい風が首元を通り過ぎたかと思うと、街路のしだれ柳の葉をかすかに揺らしている。たしかそこに人影が、と見ても誰もいない。何やら背筋がゾクツとする。そんな幽霊との出会いを求めてたくさんの方が谷中（やなか）にやってくる。東京の下町情緒を今も色濃く残す町だ。

江戸から明治にかけて活躍した名人落語家の三遊亭圓朝は幽霊が登場する怪談斬を得意とした。圓朝自身が創作した『怪談牡丹燈籠』や『真景累ヶ淵』といった怪談斬は今も多くの人を震え上がらせる。その圓朝が谷中に眠っている。

墓所のある全生庵は山岡鉄舟が幕末・維新の国事に殉じた人々の菩提を弔うために1883年（明治16年）に建立した臨済宗の寺。首相だった中曾根康弘氏など政治家や大企業の経営者など著名人が参禅に訪れる所として知られる。最近では、安倍晋三首相が、病気で一度政権の座を降りた失意の時代に坐禅に通ったことで、一段と有名になった。

その全生庵には圓朝が遺した幽霊画50幅が所蔵されている。もともと圓朝

がコレクションとして集めていたもので、没後に全生庵に寄贈された。中には円山応挙の筆と伝えられるものから、柴田是真、伊藤晴雨、鱈崎英朋といった明治時代の画家によるもので、様々な構図の幽霊画が取められている。これだけまとまった幽霊画のコレクションは他に例を見ないという。

幽霊画にほれ込んだ寿司屋

そうした幽霊画が、圓朝の命日である8月11日を中心とする毎年8月の1カ月間、「谷中圓朝まつり」と銘打って全生庵で一般公開される。平井正修住職による法要のあと、落語も奉納される。それをお目当てに全国から、落語好きや美術愛好家だけでなく、幽霊見たさの人たちが集まってくるのだ。

8月に圓朝のコレクションが一般公開されるようになったのは31年前に遡る。

当時、全生庵が保管する幽霊画は誰に見せるわけでもなく、夏に本堂で虫干しされていたのだという。その素晴らしさに目を奪われた町内のひとりの人物

が、これは町おこしの種になる、とひらめき、先代の住職に働きかけたのがきっかけだった。

野池幸三さん。全生庵前の三崎坂（さんざきざか）を少し下ったところで寿司店「すし乃池」を営む。穴子の握りが有名な谷中の名店だ。当時、開発でどんどん谷中らしい町並みが失われ、外から人がやってくるようになっていく事に危機感を抱いていた。何か町おこしの目玉になる「玉」はないか。そう思っていたところに、幽霊画との出会いがあったのだ。

野池さんは89歳になった今も谷中地区町会連合会会長など町の顔役を務めている。自らのアイデアで始まった「谷中圓朝まつり」の実行委員長も長年にわたって務めてきた。「まつり」の形

や規模は毎年姿を変えながらも30年にわたって続いていた。

今年は圓朝まつりに合わせて、地元にある東京芸術大学の大学美術館で幽霊画の展覧会が開かれることになっている。題して、「うらめしやく、冥途のみやげ」展。全生庵・三遊亭圓朝幽霊画コレクションを中心に、という副題が付いている。

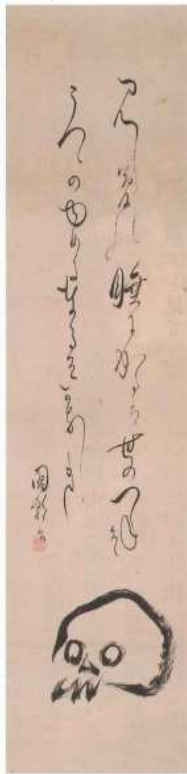
全生庵が所蔵する幽霊画の中から鱈崎英朋の『蚊帳の前の幽霊』（次頁写真・中央左下）など一部が場所を変えて展示される。

『蚊帳の前の幽霊』は怖いというよりも妖艶な美しさを感じさせる画である。会期は圓朝まつりをはさんで、7月22日から9月13日までである。9月



全生庵にある三遊亭圓朝の碑

1日以降は、東京国立博物館が所蔵する上村松園の『焔』も展示される予定だ。もちろん、谷中を訪れる人たちのお目当ては幽霊画だけではない。全生庵の入口には鉄舟や圓朝の碑が立つ。町の中には時代を刻んできた様々な史跡がある。本堂の裏手にある圓朝の墓前で手を合わせていく人も



すし乃池・野池幸三さん(右)、谷中ぎんざ(中央上)、歌川国歳『こはだ小平次』(部分)中央右下、全生庵蔵、小平忠生写真事務所写真提供、以下同)、鎌崎英朋「蚊帳の前の幽霊」(部分)中央左下、三遊亭圓朝「觀劇図自画賛」(左)

少なくない。

全生庵を包むように広がる情緒豊かな谷中の町も多くの人たちを引き付ける。寺々が建ち並ぶ間を縫う路地や土塀など、江戸を彷彿とさせる風景から、鉄の手すりや石段が続く昭和の景色まで。歴史を刻んだ史跡などの「点」と「点」を結ぶ魅力的な「線」が出来上がっている。

その魅力は、谷中に加えて周辺の根津、千駄木などに広がる。「谷根千」と呼ばれ、そぞろ歩きが根強いブームになっている。史跡などを巡るシニアの姿や、デートを楽しむ若いカップルも少なくない。点が線となり、そして面になって、下町情緒という空気を醸し出しているのだ。

「住んで商売をしている生活感あふれる町、それが谷中なんです。ほら、観光客の目の前を子どもを乗せた自転車を漕ぐ母親が通りすぎていく、日常の光景です」

そう語る野池さんが、最も大事だと思っているのが「町並み」だ。「町の魅力を守るには昔ながらの町並みを守っていくことが不可欠」というのである。下町人情が息づく町並みがあつて初めて守ることができるという

わけだろう。

町並みを守るために、野池さんは町会をあげて、古い建物の保存や、高層マンションの建設計画見直しなどを求める活動を担ってきた。そうした長年の地道な活動が、谷中らしさを残すことにつながり、多くの観光客を引き付けるようになった。

全生庵の幽霊画コレクションのような町の「宝」を持っている地域は全国に少なからずある。展示館を作って公開しているところも多い。メディアで取り上げられればブームに火が点き、一時に大勢の観光客がやってくることも多い。だがブームが去ると忘れ去られてしまうことが少なくない。

谷中の成功は、宝を生かし、圓朝まつりという町をあげてのイベントを作り上げ、町自体の価値に磨きをかけてきたことだろう。それを町会を中心とする住民たちが絶えず支え続けてきたのである。その結果、町全体の魅力が高まり、内外の多くの人を引き付けている。

いそやま・ともゆき 早大政経学部卒。07年日本経済新聞社に入社。フランクフルト支局長、「日経ビジネス」副編集長を務める。11年からフリー。近著に「国際会計基礎競争 完結編」(日経BP社)、熊本学園大学招聘教授も務める。